

ブルー  
カラー

天野  
蒼

ブルー・カラー【blue-collar】

《青色の作業服を着るところから》生産の現場で働く労働者。

## はじめに

### ・ラクして金を稼ぎたい

昔からこればかりを考えて生きてきた。学校の登下校は常に下を向いて落とし銭を探していたし、自販機を見つければ釣銭受けに指を突っ込んで小銭を探した。小学生のころから、ラクに金を稼ぐことばかり考えていた。

高校に進学し、アルバイトをするようになってから益々その思いは募った。どうして労働力と賃金が釣り合わない仕事ばかりなのだろう。僕の住んでいた東京都の最低賃金は、当時712円だった。高校生アルバイトの時給はほとんどが最低賃金で、その割に十五分や二十分のプチサービスマン残業が多く、嫌な経営者の下に就くとストレス解消（罵倒）のはけ口にされる。雇用契約を結ぶとき、遅刻のペナルティや秘密保護の約束をさせられるが、アルバイトでも有給が取れることは教えてくれない。

どうしてこんなに辛い思いをして得られるお金が712円なのか、納得が行かなかった。

この国はアジアきつての先進国じゃないのか。高度経済成長期に大人たちが死ぬ思いで働いていたのは生活をラクするためじゃなかったのか。物が溢れるほど豊かな現代で、なぜ週休4日とかでラクな暮らしができないのだろうか。ずっと疑問に感じていた。

僕は良い給料、良い待遇、良い人間関係を求めて街をさまよった。五十枚以上の履歴書を書き、三十回以上の面接をした。何をしているのか分からない、怪しい会社に電話を掛けたりもした。それもこれも、ラクして金を稼ぎたいからだ。ラクして金を稼ぐために、ラクに仕事を探してはいけない。これは僕が仕事を探す上で私針にしていることだ。入ってラクをしたければ、求職の時点で頑張ること。さすれば、光は必ず差す。

#### ・アルバイトは簡単に辞められる

試しにGoogleで「アルバイト」「辞める」と検索してみてもほしい。Yahoo!知恵袋でも良い。次から次へとアルバイトを辞めたい人たちの質問や悩みや恨みやつらみが出てくるだろう。

日本中にはアルバイトを辞めたくてたまらない人たちがたくさんいて、今日もネットのあちこちでアルバイトを辞める口実を考える会議が開かれている。2ちゃんねるを開けば、

## ブルーカラー

アルバイトをすぐにバックれる人（辞める人）・通称バックラーのランク表があちこちにコピペされている。

### S級バックラー

伝説の存在。給料と称して、売場の物やレジの金を強奪して消える最強のバックラー。場合によってはブタ箱逝きであることから、バックラーからも畏怖の対象として見られている。

### A級バックラー

活きみなぎる若者の主流。トイレの便器から外れた位置にウンコをする、売場を荒らす、勤務中に姿を消すなど、職場への迷惑行為をしてバックれる。漢の中の漢。世間からは概ね理解を得られぬが、その反骨精神溢れる姿は一部からは熱狂的な支持を得ている。

### B級バックラー

仕事を覚えて、職場の主力に近い立場を取得した後、消える。そのバックレ効果は絶大であり、職場に致命的なダメージを与えることもある。忍耐力のあるバックラ

ー、という資質が必要となり、労働時間が長くなる為、C級バックラーと比較すると少数である。

#### C級バックラー

入って数日、もしくは1，2週間で消える。職場への被害は極僅かだが、バックラー本人の貴重な時間を無駄にすることなく、ストレスも最小限で抑えられるため将来性バツグン。

#### ブロンズバックラー

即日消える豪の者達。わずか一日で職場を見極めなければならないため、かなりの判断力は要求される。

#### ゴールドバックラー

数時間、あるいは数分で勤務中に消える。もはや幻。彼らは本当に存在したのか？職場に、自信の存在を疑わせるほどの光速バツクレ技術は黄金聖闘士に匹敵。

何が言いたいのかというと、アルバイトは簡単に辞められるということだ。簡単に辞められることこそアルバイトの醍醐味。原則として会社がアルバイトを即日解雇すること

は許されない。が、雇用契約書に記されていない限り我々は好きなきに退職を申し出ることが出来る（ただし、雇用は解約の申入れの日から2週間を経過することによって終了する／民法627条）。肉体労働がきつい？ 人間関係が気まづくなつた？ 店長にいじめられている？ 簡単だ。何もかもを投げ出して逃げちまえばいい。Just beat itだ。

仕事が回らなくなる。みんなに迷惑がかかる。自分のいい加減さが許せない等々、思うところはあるだろう。でも、考えてみよう。たかだか時給800円そこらで、保険も年金もつかない完全な使い捨ての駒のような扱いを受けてまでその仕事にしがみつくと意味があるだろうか？

だって君は正社員とは違う、有象無象の一人なのだ。代替はいくらでもいる。マニユアルに沿った君のホスピタリティは、一時的にお客様を満足させることができるかもしれないが、君は昨日買ったマニアツクな煙草の銘柄を一生懸命探してくれたコンビニ店員の女の子の名前を覚えているか？

ナンバーワンでもオンリーワンでもない。僕たちアルバイトはその程度の存在だし、その程度の存在であるべきだ。必要以上に働く必要はない。責任を取るべきでもない。

僕の友達になかなかアルバイトを辞められなかった人がいる。彼は大学時代に二年ほど

コンビニでアルバイトをしていた。

責任感が強く、真面目に仕事をこなす姿勢が評価されて学生にして店長から様々な仕事を任されるようになった。二十円そこそこの時給アツプと引き替えに、本来の業務に加えて、出勤シフトを作成したり、新人の教育を行ったりと、彼以外に代替の利かない仕事を任されるようになった。

夜勤続きで目の下にくまを作り、学校の勉強もそこそこにアルバイトへ出かけてゆく。自分の代わりはいないからと働きつめた彼は、結局体調を崩してしまった。辞める際にも一悶着あつたらしい。どうして一介の学生が店の運営に近い仕事を任されなければならないのだろう。店長がいながら、バカみたいな話じゃないか。

だけど最近、アルバイトに人事や営業にあたる仕事を任せる店が増えているらしい。2012年に某製麺店が店長を正社員からパートに切り替える方針を打ち立てて物議を醸した。

不況の風が吹き荒れるご時世に、どうやら店側はアルバイトを重要な仕事を請け負う都合の良い駒のように思っているようだ。しかし案ずる事なかれ、国はまだ我々を単なる使い捨ての駒としか見なししていない。まして君たち学生の本分は勉強であり、コンビニを経



営することでも、シフトを考えて胃腸を痛くさせることでもないのだ。

アルバイトのことで大きな悩みを抱えている友達を見ると、「さっさと辞めればいいの」と思う。アルバイトに関する悩みは、恋愛が絡んでいない限り、どれも切実な問題ではない。800円の値札がついた切り売りの時間の中に切実な問題などあるわけがない。恋愛とか勉強とか部活とか友情とかの悩み事以外は、大人になったら嫌でも考えなければならなくなるので放置しておけ。来月のシフトを考えるな。真面目に青春しろ。

・ **社会勉強は大人になってからでもできる**

「社会勉強のためにアルバイトをする」と言っている高校生を見ると、お小遣いをもらえる環境なら無理して働かなきゃいいのに、と思う。社会勉強なんて社会に出たらいくらでも（嫌でも）勉強できるのだ。かじるスネがなくなるまで、親のスネをかじりつくせばいいのに、勿体ない。

僕の家は「働ける年齢になったんだからさっさと働け」というのが教育方針だったので、入学早々履歴書を書かなければならなかった。友人関係を築くことも困難な極度のコミュニケーションに社会性を要するアルバイトは苦難の連続だ。高校の授業が終わった三〇分後には店頭

に立たなければならぬので、大急ぎで電車に飛び乗り、帰りは十時過ぎ。アルバイトと学業の両立に溺れ、ときにはコミュニケーション地獄に身を焼かれる思いをしながら月に六万円かそこの金を稼いだ。

高校時代の思い出はアルバイトの他にほとんどない。貯めたお金も大学受験中に使い果たしてしまった。十六歳の頃から社会に出ているが、現在は家にこもって一日に何時間もこんな駄文を書き散らしている毎日だから、学生時代に得た社会経験はまったく役に立っていない。

そんな喪失だらけの学生時代に得た唯一の教訓と言えば、「アルバイトに全力を注いではいけない」というただ一点のみである。

・アルバイトでも、給料支払われないんだ！

本書を執筆しようと思いついたのは、2014年に抱えた金銭トラブルが原因だ。後の章で書いているけれど、勤め先の会社が倒産して一カ月分の給与が支払われなかった。今も支払催促が続いている。働いた分の金額をすべて回収できるか分からない。給与と言っても大した額ではないんだけど、ここ三カ月ほど脳の10%程度の量を使って悩み続け

ている。

給料支払いを待つ間、改めて「働くこと」の意義とか、「お金」の価値とかをたくさん考えてみたら、これから低賃金のアルバイト世界を生き抜く高校生たちに何か言いたいよ  
うな気がしてきたんだな。僕は法律の専門家でもないし、ただアルバイトした職種が多い  
というだけで、為になるアドバイスはできないかも知れない。でも、様々な業界で様々な  
人々と働いた経験から伝えられるものが少しはあると思うんだ。

指南書というにはユルすぎるならば、アルバイト体験談として読んでもらって構わない。  
高校生でもアルバイトでもない読者諸氏はお仕事エッセイとして楽しんでいただければ  
幸いだ。なお、目次で紹介している職種に当時の一時間分の時給を掲載しておいた。ぜひ  
業務内容と合わせて参照されたい。

この本を通して君に、二束三文の——できればそれ以上の——価値があることを願って  
いる。

## 目次

はじめに……………1

ラクして金を稼ぎたい／アルバイトは簡単に辞められる／社会勉強は大人になってからでもできる／アルバイトでも、給料支払われないんだ！

1章 普通のアルバイト……………15

ファーストフード（\*720）／くさいコート／店のバックヤード／辞める辞めさせない

書店（\*750）／難しい単語のラッシュ／お客さんの頭の中をのぞく／良くも悪くも希少種

喫茶店（\*720）／夢追い人はアルバイトの夢を見るか／土曜日の勤務で終了

ドラッグストア（\*760）／困ったちゃんのマウンテイング／野本くんの病氣／死闘のPR商品合戦

歯科助手 受付（\*750）／昼休憩中も時給発生／みんな仲良し（？）／歯のいちい

ち／医療に携わる覚悟

激安販売店（トホ&50）／問題ばかりの労働シネナム／まだまだ出てくる問題シネナム  
イボス／パート襲来／夢のサビカン／安いのは正義

WEBショップ（ホホ&50）／仕事頓挫／お前たちはずるいよ／シングルマザーの結託  
／ユニオンに相談／終結

小休止 派遣会社のアルバイト……………99

2006年は田雇い派遣全盛期／某都立高校の内情／田雇い派遣の終焉

2章 思わぬ僥倖！ 特殊なアルバイト……………105

おいしいアルバイトの条件／エコ返金機で小遣い稼ぎ（一缶キョ）／アプリの調査員  
（一駅キョ）／現場待機（ホホ&50）／出版社でのアルバイト（キキ&50）

3章 ウェブ上でのアルバイト……………119

無駄に妄想が捗る／ネットは情報ではなく、媒体である／○○田舎イタの美体／中

まユニティビジネスにむ用心ノ惨敗\$S\$ノ逆ライタ 詐欺なんてものも……ノ生名メタシ  
ザ——カリニイタ——の負け戦

#### 4章 高校生のためのアルバイトマニユアル

4

ありがとうノ正しいアルバイトの選び方ノ雇用契約を結ぶことノ周りの人と仲良くする  
ことノ「やりがいの搾取」にハマらないことノストックホルム症候群にはまらないことノ  
理不尽に慣れることノ奢らないこと、奢られないことノ嫌になつたら働かないことノ結局  
のところ、サクサクな仕事なんて……

#### おわりに

75

僕の現在ノ地方都市の実情

#### 作者のあとがき

79

ブルーカラー

# 1 章 普通のアルバイト

ここでは2006年〜2013年の間に転々としたスタンダードなアルバイトを紹介している。読者諸氏にも馴染み深いお店ばかりだろう。舞台裏を見学するような気持ちでご覧頂きたい。



・ファーストフード（¥720）

高校一年生の六月に、初めてアルバイトを探し始めた。自転車に乗って近所の店を回り求人募集の張り紙を探したのだが、なかなか見つからない。どうにか面接までこぎつけたスーパーのアルバイトは、試験休暇のある私立の高校生しか募集していなかった。ラクソーな仕事ばかり探していた僕も少しばかり理想を下げないわけにはいかなかった。

そこで選んだのが自宅から自転車で五分ほどの距離にあるファーストフード店だ。

社名は伏せるが、外のベンチには赤と黄のピエロ像が不気味な笑みを広げて座っているユニークな店舗だった。人が足りていないこともあって、すぐに採用が決まった。外資系の企業だけあって、面接をした店長のような立場の人のネームプレートに英語の長い役職が書いてあった。仕事の手際によつて階級が与えられ、頑張り次第で昇格（＝給料アップ）できるシステムだ。さすがアメリカ発端の店は軍隊なみに統率がとれている。

一介の高校生アルバイトにも英語の頭文字をとった馴染みの薄い役名が与えられており、階級を昇るごとに給料が十円とか二十円ずつ上がってゆく。昇格にはマニュアル本に書いてあるホスピタリティを実践することと、それらを問題化した筆記テストに合格することが求められる。上位ランクに昇格すると着用する制服のデザインも変わる。高校生ア

ルバイターたちの目標は「S A マネージャー」という役職なのだと言った。面接していたテーブルからカウンターを見ると「S A マネージャー」なる若い女の子が、てきぱきと厨房係や接客係に指示を与えていた。聞けば彼女はまだ大学生なのだという。現場監督のような立ち場であるらしいが、人手が足りなくなるとレジに立つて接客もするし、厨房で調理もするらしい。なんとまあポテンシャルの高い女子大生である。

僕もいずれあんな立場に就く日が来るのだろうか……ああああーダるいいいいなあああーと感ずる、ゆとり世代第一軍の僕であった。

## ・店のバックヤード

初出勤の日、一時間ほど前に店に到着した。スタッフルームの扉には鍵が掛かっている、二三回ノックをすると休憩中の大学生がハンバガーをもぐもぐしながら扉を開けてくれた。バックヤード兼従業員控室の床は油でてかてかして、気を抜くとツルンと滑ってしまいそうだ。八畳ほどの小さな部屋には机と丸椅子が三脚。それとカーテンレールで仕切られた小さな着替え部屋。窓ぎわにはシーズンを過ぎたキッズセットのおまけが山積みになっている。天井からは小型のテレビが吊り下げられていて、部屋の隅の事務机には古

## ブルーカラー

いノートパソコンが乗っていた。カーテンを閉じると、与えられたユニフォームに着替えて、教育係のお姉さんが来るのを待った。

### ・くさいコート

業務は大きく分けて三つあった。一つは店内のレジ周りを中心とした接客と販売。ファーストフード店の仕事と言えば真つ先に思いつく「顔」のポジションだ。新入社員は、ここから仕事を学んでいく。スマイルは0円だが、おもしろ半分におオーダーするとセットで苛立ちがついてくる。ジュースや作り置きしていたサイドメニューを用意するのもレジ係の仕事で、思えば初級にして一番やっかいなポジションを任されている。

もう一つは厨房係。こちらは主に男性アルバイトの仕事で、昼間はこの道十年のベテラン主婦パートが担当している。スピードとメニューの作り分けが重視される仕事で、基本的に接客することはない。ポテトの油が跳ねることと床が滑りやすいことを除けば、工場のライン作業と変わらない。人と話すことが面倒だったり、黙々と私の道を極めたいというアルバイトにはおすすすめの職種かも知れない。

そして、ドライブスルー専門の接客係。ノイズが大部分を占めており、断線し掛けてい

る電源の接続コードをビニールテープで補強することでなんとか延命しているインカムを装着してお客さんのオーダーをレジに打ち込んでいく。聞き間違いが多く、相手の顔色を見て対応できないために非常に非常にクレームが起こりやすい。

そもそもドライブスルーを選択するお客さんは、時間に追われていたり、せっかちだったり、短気だったりするので、店に入る前から大きなストレスを抱えている人が多い。ドライブスルーの接客係は彼らのストレスフルを刺激しないよう迅速かつ正確なコミュニケーションが求められる。

田舎に行けば行くほどドライブスルーのクレーム率は高くなる。田舎はヤンキーが多い上に、競合する飲食店が少なく混雑しやすいのだ。そもそも都会にはドライブスルーをもうけられるほどの土地がない。店舗が小さいので体制も整っているし、ファーストフード店ならあちこちにあるので、お客さんが分散しやすい。賃金の高い店ほど仕事がラクになるという、皮肉な状況がやりきれない。

やりきれないといえば、秋から冬にかけて支給される従業員共同のコートもそうだ。

ドライブスルーのため年中窓を開放しているので、寒さが厳しくなると、店からコートとカーディガンが支給される。それがまた独特の臭気を放つおぞましい代物なのだ。ご想

像いただけるだろうか、油と体臭と香水のにおいがミックスされた鼻の曲がるような臭いを。一、二着の防寒具を全員が使い回すので、冬も半ばになるとそれはもう大変なことになっていく。家に持ち帰って洗濯しろと言われてた覚えがないので、他の従業員も放置していたのだろう。

できるだけ防寒具に頼らず仕事をしていたが、そのころの店の制服といえど一年を通して薄い布地の半袖だったので、拷問かと思うほどしんどい思いをした。たまに親切な先輩が「風邪を引いちゃうよ」とくさいコートを持ってきてくれるときは断るに断れず、大して夜風も防げないニット地のくさいカーディガンを羽織りながら寒さとくささに堪え忍ぶくさい数時間を送った。つて、何回「くさい」と言っているんだ僕は……。

・辞める辞めさせない

入社して七ヶ月目に、初めてのバイトを辞めることにした。くさいコートが原因なわけではなく、ネチネチした口調の上司が気持ち悪いことや、厨房のベテランパートが例のS A マネージャーの女子大生をいじめていたことや、田舎のヤンキーからクレームが多すぎるなど、幾層にも重なって、心の中においしくないホットアップルパイを作り出して

いたのだった。

働き始めて五ヶ月目くらいから「辞めたいな」と思っており、実際に「辞めたい」とい  
ろいろな先輩に吹聴していたのだが、遠回しに辞める雰囲気を作ったところで誰も聞く耳  
を持つてくれず、仕方がないので直接上司に辞める旨を伝えた。

その上司は当時二三歳くらいだったが非常に気さくな人で、面白い冗談を言つては下っ  
端のアルバイトたちを笑わせていた。このあたりの店舗を元締めしている地域の社長のよ  
うな人（この人が従業員の退社を認める権限を持つている）とのパイプ役も見事に果たし  
ており、仕事でも諸連絡でも、この二三歳に任せておけば間違いはないだろうという感じ  
の人だったので僕もちよつとした信頼を置いていた。

ある金曜の夜、お客さんが少なくなったころを見計らつて、二三歳にあと一ヶ月くらい  
で辞めたいと思う、と伝えた。すると、いつもの調子で冗談を言っていた彼の顔色がさつ  
と変わり、見るからに焦りの色を帯びてきた。ちよつと待ちなよ天野さん、やつと仕事を  
覚えてきたところだしまだまだ君は昇格できると思うよ、考え直した方がいい、オレから  
は上の人に何も言わないでおくからもう一度じっくり考えてみてよ勿体ないよ、というよ  
うなことをまくしたてられ、引き下がるしかなくなった。上司の豹変ぶりにとりつく島な

## ブルーカラー

くその日は帰宅したのだったが、考えてみればようやく一連の仕事を覚え終わった六ヶ月目あたりに仕事を辞めると言い出したら、相手も必死で喰い止めるに決まっている。

しかし、そんなことは店側の都合で、同期でも二、三ヶ月で辞めた人はいるし、独り立ちしたアルバイトも平均二、三年ほどで職場を離れてゆくことから、相手の言い分に甘んじるわけにはいかない。若干二三歳のS A マネージャーが首を縦に振らなければ、他のお偉方に申し出るだけだ。

店舗にいたすべてのS A マネージャーにあと一ヶ月程度で辞める伺いを立てたのだが、どの人も「考え直せ」と言っただけで僕の言い分を地域の社長に伝えてくれる人はいなかった。ちなみにS A マネージャーの一人に、辞める原因の一つだったネチネチした気持ちの悪い上司がいて、彼からはいつものようにネチネチとした説教を聞かされた。モチベーションは下がってゆく一方だった。

何度言っても聞き入れてくれないので、仕方なく先輩アルバイトの協力を経て、長期にわたる休業を申請することにした。僕のいた店は二週間に一回シフトを提出する決まりだったのだが、全日「×」印がついたシフト希望票を月に二回、僕の代わりに提出してもらったことにはしたのだ。分かりきっていたことだが、一ヶ月後にネチキモ上司から電話が掛

かってきた。二回もシフト票を「×」で埋めるとはどういうことだ、とネチネチした口調で責め立てられ、結局、あと一ヶ月だけ店側が考えたシフトで勤務してくれたら退職を受け入れるという話になった。

当時のファーストフード店は二四時間営業するという感覚がなく（二四時間営業のファーストフード店が現れ始めたのは2007年ごろのことだ）、田舎ともなると九時とか十時で閉店してしまう店が多かった。僕の店は閉店の二時間前に閉店作業なる大がかりな店じまいがアルバイトによつて行われていた。生ゴミ収集やトイレ掃除、床磨き、玄関掃きなど、昼間に排出された様々なゴミを一人で処理する汚れ仕事で、ほとんどのアルバイトが敬遠しており、遅刻やドタキャンの多い人の罰則としてあてがわれることもあった。

店側の考えたシフトとは一九時出勤の二一時退社。つまり、閉店作業だけを行って帰れ、というものだった。ネチキモ上司らしい陰湿な嫌がらせだ。二時間労働では1400円程度しか稼げないし、1400円の仕事として閉店作業は安すぎる。八時間の長時間労働で高賃金を得る代わりに閉店作業という嫌な仕事が付随されているのであって、短時間労働者を都合良く使い倒すためにあてがわれている仕事でないはずだ。まあ、そんなことを言ったところで、あらかじめ決められたシフトが覆るわけではない。



嫌な幕切れではあったが、何はともあれ退職する運びになって助かった。一ヶ月間、閉店作業だけを淡々とこなしていたのだが、僕の知らないところでこの一件は大問題になっていたらしい。すべての仕事を終え、退職届を提出するために職場に顔を出したところ、地域の社長が顔を出していた。

社長は三浦和良似の、暗黒街のボスと同じ威厳を放つ一筋縄ではいかない雰囲気四十男だった。本社と、受け持っているエリアの何店舗かのお店を行き来しているらしく、滅多に店に顔を出さない。ネチキモ上司を顎で使い、正社員にはとても厳しい指示を出す、下っ端のアルバイトには常に微笑みと優しい口調を絶やさない恐るべき人物で、我々下っ端からも畏怖の対象となっていた。

彼はいつものようににこにこしながら「天野さんはとても良い子だったから、辞めてしまうのは残念だなあ」と言った。それからすぐに、「もしかしたら辞める原因が誰かにあったのかも知れないね」と付け足した。

「誰か——例えば上の人に、嫌なことをされなかつたかな？」

「は、はあ……」

「嫌なことをする人がいるとしたら、教えてほしいな」

「は、はあ……」

「別に引き留めているわけではないんだよ。ただ今後の参考に聞かせてほしいと思ってね」

「いや……そんな人は特にいませんけど」

「本当にそうかな？ 困ったおじさんとか、いなかったかな？」

「み、みんな優しくかったですよ……」

「……」

「……」

白を切ること一〇分、キングガズはにこしながら「また遊びに来てね」と言っ  
て僕を外まで見送ってくれた。こうして初・バイトは幕を閉じたのだったが、この話にはさ  
やかな後日談がある。

アルバイトを辞めて一年が経過した頃、たまたま元職場へ足を運ぶ機会があつた。先輩  
のアルバイトと久しぶりの再会を果たし、SAマネージャーともささやかな挨拶を交わ  
しながら従業員の顔ぶれを見ると、なぜかネチキモ上司の姿が見えない。彼は正社員だつ  
たので、平日は休むことなく出勤していた。風邪か何かでお休みしているのだろうか。辺  
りをきよろきよろしていると、厨房からボスの威厳を漂わせてキングガズがやってきた。

今日はこの店を巡回する日だったらしい。直々にオーダーを取ってくれるというので、恐縮しながらハンバーガーを注文していると、

「天野さん、いつでも帰ってきていいんだよ。アイツ（ネチキモ上司）は僕が消しちゃったからね」

と穏やかな調子で告げ、あつあつのハンバーガーを丁寧に袋に包んで渡してくれた。

彼のスマイルは0円だが、五百万ドルの核ミサイルと同じくらい価値のあるものだったのだ。

## 2 章 思わぬ僥倖！

おいしいアルバイト

損してばかりのアルバイト生活の中にも光は差す。ここで紹介するのは、少ない労力で一攫千金を手にした勇者たちの記録である。日本にもアメリカン・ドリームは存在するのだ。

・おいしいアルバイトの条件

おいしいアルバイトというのは、①稼げる ②仕事が楽しい（あるいは楽） ③ストレスフリー の気楽三原則が揃ったアルバイトのこと。職場によつては、④自由度が高い ⑤人に自慢できる と素敵なオプションが追加されている場合もある。ただし条件の良い職場は短命と相場が決まっている。短期間あるいは単発の仕事であるからこそ、これだけの好条件が揃うのだ。アルバイトというよりは緊急時の助っ人みたいな扱いなので、会社もゲスト待遇で我々を迎えてくれる。たまたま発見した砂漠の中の枯れかけのオアシスだ。心して飲み干そう。

・エコ返金機で小遣い稼ぎ

「アルバイト」と銘打っておきながら、早速アルバイトではない仕事を紹介してしまうのだが、僕の高校は自動販売機のすぐ隣にリサイクル活動を促進させるためのエコ返金機なるものが設置されていた。飲み終わった缶を入れると、10円玉を還元してくれるサービスである。120円のコーラが実質110円で飲めるというお得な代物だが、もちろん違った使い方ができる。放課後になると、10円玉の返金

を必要としないリッチな高校生が飲み終えた缶が、ゴミ箱にたくさん捨てられている。一教室につき、四缶から五缶ほど。宝の山である。

皆（特に恥じも外聞もない男子高校生は）授業が終わると我先にと空き缶を集め始めるので、小遣い稼ぎが成功するか否かは、担任教師のホームルームの長さに掛かっている。うんざりするくらい長いホームルームの最中に廊下からポリ袋に入れた缶を引きずる音が聞こえてくるとガツカリしたものだ。

小金を稼ぐときは、中学から親しくしている友達と二人で行った。一階から四階まですべての教室を回る必要があるので、手分けをしないと他のチームに先を越されてしまう。また熊のいる山に鈴を持って入ると同じ感覚で、いち早くすべての階に空き缶集めをしている人間がいることを知らせて、他のチームを牽制するのだ。

誰かが空き缶集めを始めたら、横入りをしないというのが空き缶ハンターたちの暗黙のルールだ。全校内を駆け回って手に入る缶は100個ほど。それを競い合っても手に入るお金はごくわずかだ。喰えない仕事だと言うことを同業者は理解している。

また大勢が大挙して空き缶集めを行うと生活指導の教員に見つかりやすい。ただでさえ全校集会では「返金機を使って不正に金を稼がないように」と釘を刺されて

いるのだ。約束を破った場合、返金機撤去にもなりかねない。古来から受け継がれてきた空気読みの技術を生かして空き缶集めは静かに、素早く行わなければならない。これ忍の極意である。

そんなこんなで手に入れた空き缶を返金し、その金で二時間のカラオケを楽しむというのが我々空き缶ハンターたちの使命だ。中には集めた空き缶を二つに切断し、返金機のNGセンサーに感知されぬよう、二倍の金額を手に入れる猛者も出現した。空き缶を二等分するのはかなりのギャンブルで、もし返金機が切断された空き缶を受け付けなかったら一個分の空き缶を損することになる。我々のチームは安牌を踏んで缶を分割することはしなかった。

そのような感じで、空き缶集めは同業者同士の暗黙の元に成立していたのだが、あるとき我々が空き缶を集めていると、二人の男子生徒が寄ってきて「俺たちが空き缶集めてるんだから、そっち集めるの辞めてくれない？」と言ってきた。

それどころか、我々が収穫した空き缶をこちらによこせという。互いの手にしている空き缶の量を比べてみると圧倒的に我々の集めた缶の方が多い。後入りのくせに市場を乗っ取ろうとするとは、おこがましい奴らである。もちろん我々は缶を渡さなかった。

しかし、代々受け継がれてきた掟が新参者によって破られようとしていることを知り恐々としたのも事実だ。戦が始まろうとしていた。醜い争いの先に残るものは、荒廃した土地と十円玉に還元されない「メッツ」の空き缶だけである。

僕の予想通り、高校を卒業して数年後、とある理由から母校に舞い戻ってみると、自販機の隣にあの返金機の姿はなかった。





### 3 章 ウェブ上でのアルバイト

コンピューターで生活が楽になると思っていたら全然違った。時給は上がらないし、金稼ぎもはかどらない。ウェブでできることといたら、エロ画像を見ることが、中東諸国に空爆を落とすことくらいのものである。

・無駄に妄想が捗る

楽して金を稼ぎたいタイプの人ならば一度は夢想したことがあるだろう。自分の考えたバカみたいな企画がネットで大ウケ。口コミ、2ちゃんねる、WEBマガジン、ステマブログを巻き込み、一気にネット界のスターダムにのし上がる。アフィリエイトの貼られたブログには毎日二万を越えるアクセスが集中し、一躍おチャット間の人気者。ウェブ業界の実業家たちがFACEBOOKで共同事業を持ちかける。

もつと現実的な夢想家ならば「投資」や「トレード」、「株」といった言葉を連想するかも知れない。パソコンの前で好きな時間に好きなだけ金を稼げたらどんなにラクだろう。

人にすすめられて「文章ライター」を名乗りだしてから、ウェブ上の豊作物を過剰に意識するようになった。まだ誰も手を着けていない未開の地があるのではないかと、ひたすら電脳の世界をさまよい続けて得た事実を、フレッツ光より早く皆様にお届けしたい。

ネットには何も落ちていない。

元博報堂職員の編集者・中川淳一郎は「ウェブはバカと暇人のもの」でこう述べ

ている。

そりゃあ、これまで発信の機会がなかった人が発信できるようになったのはすばら

しいことだが、発信する内容に価値のある人は、ネットではなく、リアルの世界で

もその発信内容が「換金」されるはずだ。

断言しよう。凡庸な人間はネットを使うことによっていきなり優秀になるわけでは

ないし、バカもネットを使うことによって世間にとって有用な才能を開花させ、世

の中に良いものをもたらすわけではない。

バカで暇人の僕は実地で上記のことを学んだ。

あまりに手元に何も残らなかったの（むしろ搾取されたので）、せめてもの慰めとして、何も残らなかったことをここに書き残しておきたいと思う。皆さんもあれ

これ尽くしたあとで絶望するよりはじめから絶望しておいた方が、ネットで金を探  
すエネルギーを他のことに費やせると思う。もう一度、声を大にして言おう。「ネ  
ットの世界」でお金を稼ぐ方法はありません！

これから僕が描写するのは「フリーランスのウェブライター」や「意識高い系だ  
が何のスキルもない人々」が住む世界の話だ。ひとまとめにしているが「フリーラ  
ンスのウェブライター」が「意識高い系だが何のスキルもない人々」とイコールで  
結ばれているわけではない。赤唐辛子と青唐辛子くらいの違いはある。スイカと種  
なしスイカとか……今川焼きと大判焼きとか。あ、同じか。

・ネットは情報ではなく、媒体である。

電腦の海をさまよった後、ゴーストが僕にささやきかけてきた。「お前は何を勘  
違いしている。ネットがお金をくれるわけではない。人間がお金をくれるのだ。」  
ネットはあくまで人間同士をつなげるためのツールの一つにすぎない。ネットで  
お金を稼ごうとしてもなかなか上手く行かない人は、このことに気づいていないこ  
とが多いのではないだろうか。ネットを相手にするからいつまで経っても仕事がい  
ない。お金を貰いたいのであれば、お金を持っている人間を相手にしなければ。

ネットが出現したところで労働の仕組みってそんなに変わってない。電話でアポイントを取って、顔を付き合わせて打ち合わせをして、作った品を宅急便で送って、請求書と納品書を封筒で送って……みたいなやりとりが、SNSとホームページとブログとメールとスカイプに変わったただだ。ネットにそれ以上の価値はない。だからネット上に成果物をアップロードしただけでは仕事はこないし、匿名同士のやりとりで終始するおままごとのような仕事にお金は支払われない。

ホームページを作る人（ウェブデザイナー）やウェブサービスのシステムを開発したり修理したりする人（システムエンジニア）が、ネットに関する仕事をしていて食いつぶげれないのは、あくまでツールの専門家だからだ。ネット版・生活インフラってやつ。水道管工事の人や郵便局員と一緒に。ちまたで「IT土方」と呼ばれている彼らも報酬未払いされたり、依頼主に雲隠れされてしまったりしているのだから（嘘だと思うなら「エンジニア」「給料未払い」などで検索をかけてくれたまえ）、素人同然の僕たちがネットの世界でお金を得るのは、砂漠の中に米粒を見つけるくらい難しい。

そういえば、漫画家のやなせたかしがほとんど無料でキャラクターデザインの仕事を引き受けていたことで、デザイン界の新人たちが「大御所が無料で描いたら

我々も無料で描かざるを得なくなってしまう」と嘆いていた。フリーコンテンツだらけのネットの世界にも「この仕事ならこのくらいでしょ。だって君よりも上手い作り手がネットで無料公開しているんだからさ」みたいな風潮が蔓延している——っていうか、セミプロ以下の腕前のクリエイターに金を払いたくない。ハッキリ言えば、「わざわざ頼んでやってるんだからさ、無料（あるいは格安）にしてよ」。

顔が見えない世界だからこそ、むちやくちやな依頼をふっかけてくる厚顔無恥な輩の多いこと、多いこと。

ネットだから無料（あるいは格安）の世界観が既にパソコンの中に根付いてしまっているの、並大抵のことでは誰も金を払ってくれない。代表的な仕事は「100円ライター」との異名を持つ、ネットの下請けライターだ。

続く

# ブルーカラー 天野 蒼

2015年

文学フリマ東京

福岡ポエイチ

文学フリマ福岡 にて

## 発売予定！！

定価：400円（予定）

ご予約は [ao.amano@gmail.com](mailto:ao.amano@gmail.com) まで